

2000年 農業ゼミ

News Letter

Vol.12

仲田さんに聞いた

今年のみかんあれこれ

辻野拓也

今年の省農業みかんの防除暦ですが、昨年と同様に、一月にカイガラムシ防除としてマシン油を、二月に除草剤としてラウンドアップを、各一回ずつ散布しました。今年は、六月の殺菌剤散布はせずに済んだそうです。寄生蜂の働きとあわせて、みかん園内の病害虫は低密度を保つており、健康な省農業みかんが出来ました。

今年のみかんの特徴は、まず、甘い！（木によって個性があり一概にというわけではありませんが）。皆さんのお手元のみかんはいかがでしょうか。

この省農業みかんを作っている、和歌山県下津町の仲田芳樹さんに、今年のみかんについてお聞きしました。今年は、全国的な猛暑に見舞われましたが、仲田さ

ん曰く、「八月に（雨が）一滴も降らなんだ」とのことです、和歌山も例外ではなくて、和歌山も例外ではなかったようです。みかんの糖度は、夏の天候に大きく左右されます。雨が少なくて、カラッとした晴れの日が多かつた今年の夏は、味の濃い、甘いみかんを作るのに最適でした。実際、木からもいで食べてみると

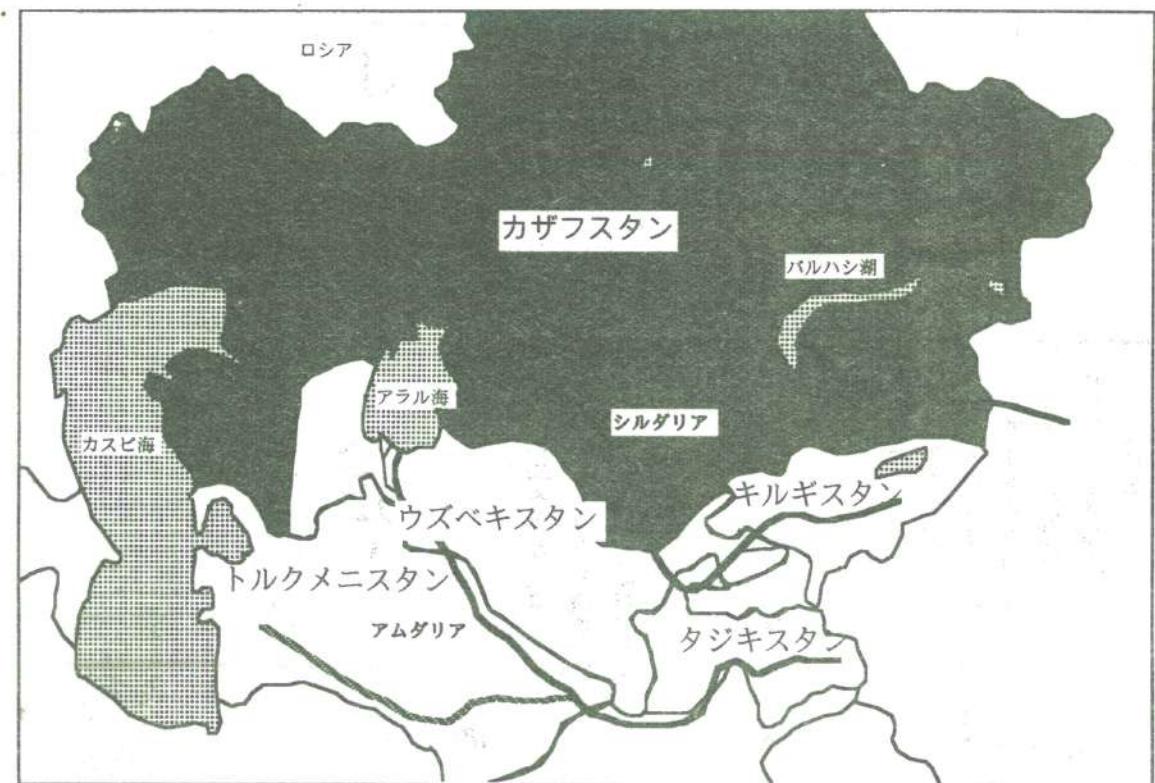
1月の初めでしたが、仲田さん曰く、「もうしっかりと味が入つた。今年は収穫を早めたい」というくらい、その出来に満足のようでした。

しかし、夏の暑さがもたらしたものは、良い事ばかりという訳ではありません。サビダニは今年のような高温乾燥を好んで発生するとても小さなダニで、害を受けたみかんは、味は変わらないのです。皮が硬くなり、赤茶けてしまうので、一般市場ではなかなか買って貰えません。そのため多くのみかん園では、発生の有無に関わらず予防的に農薬を散

～もくじ～



- 2面 水と農業を考える
～中央アジアの大地から～
- 4面 JAS制度改正と「有機農業」
- 6面 済州島みかん園訪問記
- 7面 農業ゼミ今年の主な活動
- 8面 「みかんの葉」
- 9面 南紀白浜より 一紅葉一
- 10面 私から見た農業ゼミ
- 11面 ホームページ紹介・編集後記
- 12面 みかんを長持ちさせるために



カザフスタンとウズベキスタンの国境にあるアラル海。農業用水の取水でこのアラル海に流れ込む水は減少を続けた。そのため湖の面積は縮小を続けており、1960年代の半分にまでなってしまった。

業」を継続していくならば、二十一世紀の食糧問題の前途は暗いものとなるであろう。まして、八〇億とも一〇〇億人とも予想される人口増加に対しても、なす術もなく、食糧の取り合い（戦争）を招くであろう。食糧の半分以上を海外からの輸入に依存していく我が国が食の危機に陥ることは必至と予測しておるべきであり、美田を漬して高速道路を縦横に張りめぐらすような政策は次の時代の食を潰していくことに気がつかなければならぬ。

一九九七年に出された国連の水資源に関するレポートは、二〇世紀は石油をめぐる戦争の世紀であつたが、二十一世紀は水をめぐる戦争の世紀になる危険性を指摘した。人口増加と農地の荒廃は深刻な食糧危機をもたらすであろう。食糧生産に必要な水を確保するために各國

もうひとつ、今年は「休憩」している木が多かつたことがあります。みかんの数は、その年の春に咲く花の数に大きく影響されます。たくさんの花が咲いた後、小さなみかん（「モモ」と呼ばれます）が着果します。木の能力には限界があるので、数が多い場合には余分のモモを落とし（「摘果」と呼ばれます）、みかんの大きさを程良く揃えます。これには、次年度へ向けて木の余力を残しておき、毎年安定した収穫が得

布しますが、もちろん省農業園では散布しません。今は急遽、ゼミのメンバーで全園の被害状況を調査したところ、幸いにも軽い被害であることがわかりました。皆さんにお届けしたが、みかんの中に、一個か二個混じっているかもしれません。外見はひどいですが、味は他のものと変わらないので、捨てずにお食べ下さ

水と農業を考えて

卷之二

石田紀郎

ここ一〇年ほど、中央アジア・カザフスタン共和国のシルタリア流域の農業と環境の変化を見てきた。この地域は一九九一年までソビエト連邦の構成国であり、一九六〇年代から「自然改造計画」政策によって「沙漠を緑の大地」に変ってきた。年間降水量が一〇〇ミリしかない沙漠に、縦横に建設された運

河がシルダリアの水を運び、たしかに沙漠に大水田地帯を現出させた。建設から三十〇年が経過し、ソビエト連邦崩壊と中央アジア諸国の独立という激動の時代の中で、「緑の大地」は広大な「塩の大地」に変貌しつつある。その理由は單一ではなく、ここで解析することは割愛するが、地域の環境を人間の技術で強

引にねじ曲げて成立させた「強腕農業」の末路を見る思いである。

域にも影響を及ぼす環境ホルモン作用の存在が判り、農薬の設計思想を根本的に変革しなければならない事態に追い込まれて いる。

られるようになります。それでもみかんの木には、たくさん実を成らせる年（表年）と、比較的少ない年（裏年）を繰り返す性質があります。今年は裏年にあたり、ほとんど花を咲かせずに完全に「廿

ボって」しまつて いる木が
目立つていました。さすがに仲田さんも、「どの木にも同じように肥料をやつて愛情をかけて世話して
いるのに、勝手に休んでし
もうちよるよ。・・・これ
だから農業は机上の計算

ではできんなあ」と苦笑いです。「来年は?」と尋ねると「花あ来る(花がたくさん咲く)。摘果が楽しみやなあ」と言つて笑つていました。

と化学力という人類の英知が自然を屈服しうるとの過信のもとで展開された。そして、二〇世紀後半は自然を屈服させ、従わせられないことが判りだし、た時代である。たとえば、化学力の頂点を極めたと

（いしだのりお・アジア
アフリカ地域研究科教授）



認証を受けた有機農産物にはこのマークがつけられます。

の多年生作物は収穫前三年間以上無農薬無化学肥料であること、となります。また、遺伝子組換え作物については、たとえこの条件をクリアしても、「有機農産物」とは認められません。もちろん実際には、使用可能な資材などさまざまな事柄に関して、細かい規定がありますが、大筋ではこの認識でよいと思います。

ただ、このJAS制度、問題なのは、「有機農産物」と名乗るためには認証を受

らば、日本で農業を営むとき、完全無農薬を実現できることは非常に限られています。気候や土壤の質など、いろいろな条件を加味したとき、ある程度の農薬散布を実施しないと、収穫が大幅に減つ

たり、場合によつてはまったく収穫できないことがあります。それゆえ、実際には「減農薬」による栽培しかできない生産者がたくさんいるのです。その意味でこのJAS制度は、農薬の散布をまったくしない生産者と、最低限の農薬を使用した生産者の間に、非常に大きな格差を作り出す制度だといえます。

もちろん、きちんとした認証をすることで、まがいものを市場から駆逐できるというメリットがあります。また、農産物の輸出入をめぐり、有機農産物の表示制度に関する国際的な整合性を図る必要がありました。そうした意味で、このJAS制度による認証は、必要なことだったのは事実でしょう。

しかし、農薬を減らそうとがんばつてゐるあらゆる農家が、JAS制度による認証を受けて、「有機農産物」という表示にこだ

わっていくのかどうかはまだわかりません。認証にかかるコストと手間を考えると、みんなが喜び勇んでも認証を受ける、ということにはならないかもしれません。しばらくは「模様眺め」の状況が続くと思われます。またそうした生産者側の事情ゆえに、大手スーパーも、有機JASマークのついた農産物を積極的に扱うという方針を打ち出しているところは少ないようです。これからどういう方向に向かっていくのか、しばらくやつてみないとわからない、というのが現状です。

有機農産物と遺伝子組換えの表示が制度的に決められたことで、食品をめぐる状況が前進したように見えます。確かに、三〇年前と今日を比べると、随分マシになりました。しかし、問題がなくなつたわけでもなければ、解決したわけでもありません。「長寿国といわれながら、食べるものが悪くなつてているので、今の若い世代の人たちはあまり長生きできないのではないか」という寓話は依然としてリアリティーを持つています。食べ物をどうしたらよいのか。生産者とともに、これからもこのことを考え続けていかなくてはなりません。

(はらやまこうすけ・農学研究科博士課程二回生)

JAS制度改正と「有機農業」

JAS制度の改正で、新たな食品表示が制度化されます。有機農産物もそのひとつです。かつては日陰者扱いされた有機農産物も、いよいよ本格的に制度として認められることになりました。ただ、このことを素直に喜んで良いのかどうか、難しいところがあるように思います。

JAS (日本農林規格)などの品質と表示に関する制度で、「農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律」(JAS法)の定めにしたがって運用されています。このJAS制度が改正され、来年の四月から、有機農産物の認証がはじまるほか、遺伝子組替え作物やこれを用いた食品はそのことを表示することが義務づけられます。

このほか、実は今年の夏から、野菜などの生鮮食品について、国内産は都道府

などの品質と表示に関する制度で、「農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律」(JAS法)の定めにしたがつて運用されています。このJAS制度が改正され、来年の四月から、有機農産物の認証がはじまるほか、遺伝子組替え作物や、これを使用した食品はそのことを表示することが義務づけられます。

手スーパーなどでは、かな
り前から「○○県産キヤベ
ツ」というような値札を見
ることができましたが、今
年から、どの店に行つても
これを確認できることに
なっています。しかし、小
さな八百屋さんなど、まだ
この原産地表示がされて
いないお店もたくさんあ
るようで、徹底するまでに
は時間がかかりそうです。
原産地表示はさておき、
私たち農業ゼミのメン
バーの、そして恐らくはこ

いし。なたれ方で結果、これらを主な原材料とする加工食品です。この「加工食品」というのは、味噌やしょうゆ、スナック菓子などのことです。これらの食品のうち、遺伝子組換え作物が含まれているかどうかと、含まれているかどちらかでないもの（きちんと分けてないもの）について、次のように表示が義務づけられます。

有機農産物について
「有機農産物」「有機」
称は、来年の四月以降、JAS制度による認証を受けなければ表示できなくなります。これまでも罰則のない「ガイドライン」は決められていましたが、来年からは罰則つきのJA制度が適用されます。この制度のもとで「有機農産物」として認められるための条件は、作付け前二年間以上無農薬無化学肥料で

みの皆さんも関心の高い
遺伝子組換え食品と有機
農産物の表示について、こ
こで少し詳しく見ておき
たいと思います。

● 遺伝子組換え作物が
入っているかもしけない
もの：「遺伝子組換え不
分別」

遺伝子組換え食品に

九

遺伝子組換え作物が
ついているかもしれない食
べ物……「遺伝子組換え不
別」

換えの表示が制度的に決められたことで、食品をめぐる状況が前進したように見えます。確かに、三〇年前と今日を比べると、随分マシになりました。しかし、問題がなくなつたわけでもなければ、解決したわけでもありません。「長寿国といわれながら、食べるものが悪くなつてはいるのではなかい」という寓話は依然としてリアリティーを持つています。食べ物をどうしたらよいのか。生産者とともに、これからもこのことを考え続けていかなくてはなりません。

除草剤を地下水汚染の原因物質として排除する一方で、日本ではほとんど使用されていないボルドー液のような無機農薬を、あまり躊躇せずに使用している点において、同じ省農業を行っているとはいつても、私たち和歌山の省農業園とは農業に対する考え方がかなり異なることを実感しました。

</div

農業ゼミ

URL: <http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/krap/homepage.html>

石田研究室の案内、ゼミの予定、報告書『省農薬の可能性』全文、農薬データベース(検索可)など内容盛りだくさん！「カイガラムシ発見マニュアル」であなたもカイガラムシ通？ぜひ一度御覧下さい。

編集後記

今年もおかげ様で、無事皆さんに省農薬みかんと、このニュースレターをお届けすることができました。ご協力下さった方々に心から御礼申し上げます。このニュースレターが、単に売り手と買い手の関係をこえ、私たちと皆さんとの交流が深まるきっかけとなれば、と思っております。みかんをお供に、皆さんがよい年をお迎えになることをお祈りしております。

(砂)

い環境の変化から、その年で、全く違う実り方をします。自ずと不思議なバランスを取りながら。自然という、壮大で神秘的なシステムを前に、人の所為などちっぽけなものに思えてきます。今日、経済効率最優先、「時は金なり」で、常にスピードや結果が求められる社会ですが、そんな大自然には、できうる限り、自然の時間に身を合わせ、あくせくせずに、大

きな広い気持ちで、接していくことが大切なのです。人がどこかで置き忘れてきてしまつたそんなゆとりを、和歌山のみかん園は気づかせてくれます。これから、ゼミ内のざつくばらんで、温かく、どこかほつとする雰囲気が生まれているのだとも思いました。

きな広い気持ちで、接していくことが大切なのです。人がどこかで置き忘れてきてしまつたそんなゆとりを、和歌山のみかん園は気づかせてくれます。これから、ゼミ内のざつくばらんで、温かく、どこかほつとする雰囲気が生まれているのだとも思いました。

とが最近やつとわかり始めました。

読んでいて、少しでも農薬ゼミに興味を持つて下さった方は、ぜひ気軽に石田研究室へお越し下さい。新しい方と、いろいろなお話をできることを大変楽しんでおります。みかん園にも是非お越し下さい。ゼミの長い歴史から見れば本当に赤子同然の私で

すが、これから、皆さんのように息の長い活動をしていければと思っております。

さて、このようにぬけぬけと、奇麗事をならべた私のゼミ内での立場はこれから……？

2000年12月8日

ちなみに、紅葉を美しいと本当に自覚したのは、私が浪人していたときである。十八回も秋を経験してやつと何かを見い出した。自分の外側で何が起こっているのかというのを、多少は感じるようになつた証拠かもしれない。紅葉は、それまではなんとなく通り過ぎるだけのものだつた。京都へ来て、紅葉の美しさ、周囲の山が色づく風景を実は思う存分享受していくのだった。そして南紀白浜へやつて来て、そのことをますます意識させられた。

秋を告げるのに、もうひとつみかんがある。でも、これはこれまでの人生で、紅葉と違つて欠けていたことはない。紅葉がなくなつて、さらにみかんがなくなつたら、私は秋を何を感じるのだろうか？これが、みかんと縁がない生活をしてみなければわからぬだろう。でも、私はそんなことを知る機会は当分ない。仲田さんのみかん園に通つている限りは、みかんとはこれからも縁があり続けるであろうから。

私が見た農薬ゼミ

砂本健

ちなみに、紅葉を美しいと本当に自覚したのは、私が浪人していたときである。十八回も秋を経験してやつと何かを見い出した。自分の外側で何が起こっているのかというのを、多少は感じるようになつた証拠かもしれない。紅葉は、それまではなんとなく通り過ぎるだけのものだつた。京都へ来て、紅葉の美しさ、周囲の山が色づく風景を実は思はず存分享受していくのだった。そして南紀白浜へやつて来て、そのことをますます意識させられた。

秋を告げるのに、もうひとつみかんがある。でも、これはこれまでの人生で、紅葉と違つて欠けていたことはない。紅葉がなくなつて、さらにみかんがなくなつたら、私は秋を何を感じるのだろうか？これが、みかんと縁がない生活をしてみなければわからぬだろう。でも、私はそんなことを知る機会は当分ない。仲田さんのみかん園に通つている限りは、みかんとはこれからも縁があると想けるであろうから。

(かこいしようた・理学部四回生)

私から見た農薬ゼミ

砂本 健

はじめまして。今年から、農薬ゼミによせて頂いております、砂本と申します。今回は、新人の目から見た農薬ゼミについて、書かせて頂こうと思います。拙い文ですが、これで皆さんに少しでも農薬ゼミのことを知つていただければ幸いです。

私は当初、「農業ゼミ」という名前やゼミについてのそれまでの知識から、農業の廃絶に向けて、高度な議論を交わしながら、日々熱く活動しておられる堅い様子を思い浮かべてしていました。しかし、実際にゼミに参加させていただきと、どうも感じが違います。いつも真剣に、理想の農業に向けて頑張つてくれるような熱気が感じられません。のんびりしているというのでしょうか。私は少々拍子抜けしてしまいました。実際にみかん園を見せていただいたところ、ほとんど虫はおらず、日立った病気もありません。「ひょっとして、省農薬栽培など簡単で、もう当初の目的は達せられて、ゼミの皆さんに熱意がなくなってきたのではないか」とまで考えてしまいました。その時よりは、農業ゼミのことをもう少し深く知った今となつては、こん

な考えを少しでも抱いたことがあります。ことを本当に恥ずかしく感じています。

というのは、今のみかん園が、ゼミの多くの皆さんとの長年の努力の結晶であることをやつと知ったからです。

お手本などない、前代未聞の省農薬みかん作り。すさまじい勢いで生える雑草。無尽蔵にわく虫や病気。育たないみかん。見栄えの悪いみかんのマークティング。次から次へと出てくる難題に、試行錯誤を繰り返しながら、こつこつと小さな苦労を重ねて、やつと今のみかん園が出来上がったのです。

そして何より、開園当初から毎日丹念にみかん園を作られた仲田さんの努力がなければ、絶対に今のみかん園は生まれなかつたでしょう。

また、人の大きさといい



読んでいて、少しでも農業ゼミに興味を持つて下さった方は、ぜひ気軽に石田研究室へお越し下さい。新しい方と、いろんなお話ができるのを大変楽しみしております。みから園にも是非お越しください。ゼミの長い歴史から見れば本当に赤子同然の私で

すが、これから、皆さんの
ように息の長い活動をして
いければと思っております。

さて、このようにぬけぬ
けど、奇麗事をならべた私
のゼミ内での立場はこれ
から……？

(すなもとたけし・総合
人間学部一回生)

今年もみかんをお買いあげいただき、

ありがとうございました。



おいしい省農薬みかんをお届けします。

このみかんは、食べる人と作る人の安全を念頭に置き、農薬ができるだけ使わずに栽培されています。市販のみかんと比べて器量はよくありませんが、懐かしい自然の甘みと酸味を味わうことができます。

～みかんを長持ちさせるために～

箱の中のみかんをいちど新聞紙の上で転がして、余分な水分を飛ばし、よく乾いたら箱の中に戻して、風通しのよいところで保管して下さい。また傷んだミカンがありましたら、見つけ次第すぐ取り除いて下さい。こうして頂くと痛みにくくなり、条件がよければ数週間保存できます。



みかんや農薬ゼミに対するご意見、ご批判、ご要望などがございましたら、どんどんお寄せ下さい。皆さまからのお声を、私達の活動の励みにして、これからも活動をしていきたいと思っております。

農薬ゼミニュースレター第12号

2000年12月8日 京大農薬ゼミ発行
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部 石田紀郎 気付

Tel/Fax : 075-753-6133

E-mail : krap@kais.kyoto-u.ac.jp

URL : <http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/>

[KGRAP homepage.html](http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP/homepage.html)

早わかり！



省農薬がわかるリーフレット

Vol.2

発行:京大農薬ゼミ

Tel&Fax 075-753-6133

農薬を使わないでみかんを作る。言うのは簡単ですが、実際にやるとなると、これがなかなか難しいのです。このみかんを栽培している仲田芳樹さんが省農薬みかん園を開いたのは、1974年のことでした。その後の道のりは、害虫の大量発生による壊滅的な被害を受けるなど、決して平坦なものではありませんでした。

省農薬みかん園のこれまでの歴史は、農薬を減らしながら経営を成り立たせるという難しい課題に挑戦してきた歴史なのです。今回は、省農薬栽培の技術を獲得するための闘いの歴史を振り返ってみることにしましょう。



博士！博士！私たち「省農薬みかん」ってどうやってできるんですか？
農薬の使用ができるだけ省いてるってのは前回教わったんですけど。

いい質問だねえ。

昔は「農薬をつかわなきゃ、みかんなぞ作れん」と思われていた時代もあったんだよ。



でもでも、農薬がほとんどなくたって、私たちはちゃんと毎年おいしく実ってますよ。
見た目はちょっと悪いけど。

そう、自然と向き合って、うまく利用すれば、農薬をほとんど使わないで君たちのようなみかんをつくることはできるんだ。今回はそれを勉強しようか。



登場人物



みかんちゃん
好奇心旺盛な

新人



Dr.のり
省農薬に詳しい
農学博士



今回のテーマ

省農薬みかんはどうやってできたの？

農薬を使わないと・・・

普通にみかんを作るとき、年に10回以上も農薬を使うのはなぜでしょう？それは（1）害虫からみかんを守る（2）病原菌の感染でみかんが病気になるのを防ぐ（3）邪魔な雑草を取り除くためです。では、農薬を使わずにほっておくとどうなるでしょう？害虫と病気でみかんはほとんど実らないし、ひどい場合は木が弱って枯れてしまいます。それに、特に年寄りには草刈りだって大変です。農薬なしでみかんは作れないと考えるのも無理ありません。

どうしたら農薬を減らせる？

いきなり無農薬にしないで、様子を見ながら、省けそうなところだけ省いてみかん作りが始まりました。その中で様々な対策方法を試しましたので、紹介を。



1) みかんの最大の敵、ヤノネカイガラムシを天敵を使ってやっつける

ヤノネカイガラムシは小指の先の半分くらいの小さな害虫です。少しくらいならへのかっぱですが、気を抜くとあつという間に枝や葉にびっしり！大切な養分はほとんど吸い取られて木が弱り、みかんはほとんど実りません。

農薬を使わなくてもヤノネカイガラムシが少しのままでいてくれるようにしたい！

そこで、天敵ヤノネツヤコバチの登場です。ヤノネツヤコバチは小さくて目にほとんど見えません。ヤノネカイガラムシに卵を産み、孵化した幼虫はヤノネカイガラムシをもぐもぐ食べて殺してしまいます。つまり、天敵ヤノネツヤコバチはヤノネカイガラムシを退治してくれる農薬の代わりになるわけですね。

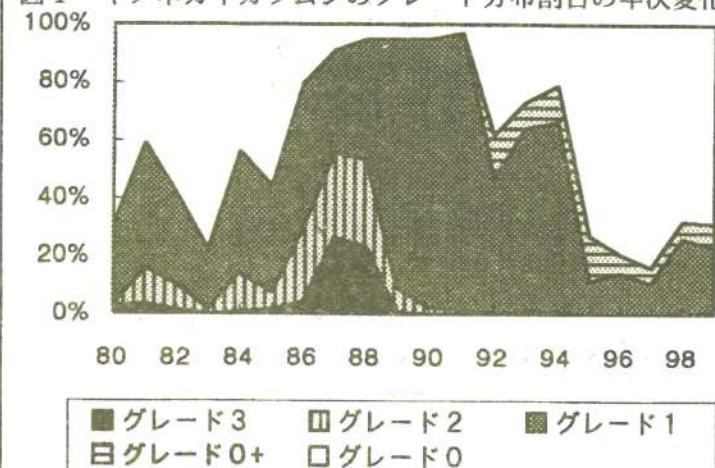
ヤノネツヤコバチを増やすには、まず、卵を産みつけるヤノネカイガラムシを増やさなくてはなりません。そう、農薬を一切使わない年が続きました。すると・・・ヤノネカイガラムシは順調に（？）増え、みかんが危うくなりました。そこでヤノネツヤコバチを放ったのです（1987年）。カイガラムシが減ったら成功、増えたら失敗で農薬を撒くしかありません。結果は、なんと大成功！ヤノネツヤコバチはみかん園に住み着き、ヤノネカイガラムシを退治してくれました。ヤノネカイガラムシはどんどん減り、今ではほとんど見られません。

2) ほかの虫や病気も・・・

みかん園にはほかにもいろんな害虫がありますが、ヤノネカイガラムシの退治に成功するとあら不思議。一緒にどんどん減っていきます。おまけに、黒斑病やそうか病といった病気も減っていました。これはおそらく、木が、病気や虫に負けない「元気」なカラダになったからでは？と考えています。

結局、ヤノネカイガラムシをやっつけることで、殺菌剤をまかなくて済むようになりました。殺虫剤も「マシン油」（ただの油で薬ではない。カイガラムシが窒息死する）を年一回まくだけになったのです。

図1 ヤノネカイガラムシのグレード分布割合の年次変化



※虫は、グレードの数が小さいほど少なくなっています。

3) でも雑草は思うようにいかない

残る強敵は雑草です。ほうっておくと、みかん園を雑草が覆ってしまい仕事にななりません。そこで、「邪魔にならない草」をびっしり生やして雑草を防いだりと、いろいろ試みましたが、うまく行きませんでした。草刈り機でこまめに除草したくとも、夏場の斜面では本当に大変なんです。そこで、みかんを収穫するずっと前、5月に一回だけ除草剤を使っています。

4) それ以外は他の園といっしょ

その他の管理、たとえば夏場の水やり、春の剪定、春と夏の肥料入れなどは、他のみかん園とまったく一緒です。



農薬を使うと、害虫も病気もまったくいない、とってもきれいなみかん園で、ぴかぴかのみかんをつくることができます。でも害虫以外の天敵や他の虫もみんな農薬を嫌って来てくれません。省農薬みかん園では、見た目にはあまり目くじら立てないことにしています。すると、害虫もいますが、天敵やアリ、アブラムシ、アゲハチョウなんかがやってきて、にぎやかです。こんなみかん園でできたみかんちゃんにはお肌にシミがあったり、ボコボコたりするんですけど、それはみかんちゃんがたくさんのお友達に囲まれている証拠なんです。



のぞいてみよう！

「有機農業」は「省農薬」？



有機農業ってなんだろう？

有機農業の歴史は、それぞれの生産者が、それぞれの条件の中でよりよいやり方を探していく鬱屈たるものでした。農薬を全く使わないで済むのが一番よいのですが、気候や土壌など、様々な条件のなかで、全ての農園でそれを実現できるわけではありません。何とかして農薬を減らすことができないか、どのくらいなら減らせるのか、農薬を使う代わりに何をしたらよいのか、収穫が減るのではないか、経営を成り立てるにはどうしたらよいのか・・・、そうした、決して終わることのない試行錯誤の連続に彩られてきたのが「有機農業」でした。

有機農産物の認証制度

来る 2001 年 4 月から、改正 JAS 制度による有機農産物の認証が始まります。それによって、果樹の場合、過去 3 年以上は農薬や化学肥料を使っていない農園で作られた農作物、つまりエリート中のエリートだけが「有機」と名乗れるのです。

確かに、これまでに農薬をそれほど減らしていないにもかかわらず「有機農産物」と表示するようなインチキが一部であったのは事実です。そういう意味では、このような制度は必要なのでしょうか。しかし、完全無農薬・無化学肥料というエリート農産物以外は、すべて落ちこぼれとして格下に扱われるようになる危険性もはらんでいます。

「省農薬」で目指していること

以上のような意味もあって、農業ゼミでは、「有機」ではなく「省農薬」という言葉を使ってきました。日本各地の農家はすべて労働力、経済性、立地、気候などまったく異なるのですから、あらゆる生産者が「完全無農薬」による生産ができるわけではないのです。この当たり前の現実の中で、「可能な限り」農薬を省いていくことの重要性を考え、訴え続けています。農業ゼミの「省農薬みかん」は、まさにそんな取り組みでできた「果実」です。これからも、自信を持ってお届けしていきます。

今回の“農薬を使わないみかん作り”、いかがでしたか？

それでは、また来年、お目にかかりましょう。

このリーフレットを毎号集めると、省農薬の早わかり小冊子になります。